

翻訳における虚字の取扱いについて

(聊齋志異の国訳をめぐる)

井 上 寿 老

翻訳のオ一義が原文の内容を忠実に移すに在ることは今更言うまでもない。いかにその表現の技術が優れていても、又いかに文学として立派なものであつても、もし原文から遊離していたり、原文の内容を誤り伝えていたりしていたなら、それは翻訳としては決して高く評価されることはできない。翻訳も広義に於ては亦文学の一分野である以上、そして表現美というものが文章の重要な一面である以上、翻訳に於てもレトリックはもとより大切であるが、しかしそれは内容の真を伝え得た後の問題で、truth から独立に beauty を主張することは、翻訳に関する限り許されない。その意情を如実に余すところなく伝えて、而もそれに加うるに優れた技巧を以てせる者、それが名訳である。ところで此の「原文に忠実」ということも漠然としていて、ただ其の筋を誤りなく伝えただけでもそれは言えないことはないものであり、翻訳論にはこうした原作の宏旨大綱を移せば能事畢るといつた大よ様な翻訳観もあり得ようが、できれば原作の情調の細かい点までも翻出したいものである。筆者は専攻の学問の立場から翻訳に対しても此の態度を取り、少し酷であるかも知れないが、其の語助辞の末にまで細かい神経の行きわたることを要求する。勿論それは大変むづかしいことで、之を能くすると曰うのではない。焉に学ばんことを願うのである。

虚字とは、説くまでもないことながら、名詞・代名詞・形容詞等、其の義の実質的な者(実字)に対して、其の義の形式的な副詞・接続詞・前置詞・助詞等を謂うのであるが、文章のニュアンス(nuance)つまり作者の繊細な感情は多く此等の虚字に託せられるのである。しかしそれだけにそれを如実に移翻するということは楽なしごとでない。荻生徂徠曰く「文理ヲ知ントセバ、マヅ字品字勢ト字ノ用トヲ能(ヨク)合点シテ、其上ニ字義ヲ能(ヨク)トクト合点スベシ。就中、助語ヲ知ラザレバナラヌコトナリ。助語ハ文ノ關鍵(シマリ)ナリ。実語ヲ引マハスモノナリ」(訓訳筌蹄)と。所謂「助語」は即ち虚字で、「実語」(実字)に対する。よく虚字の訓訳に切なるを知れりと謂うべきである。而るに其(徂徠)の訳しているところを観ると、そこにはやはりかなりの誤訳が発見される。例えば彼が「誠」と「真」とを弁じ、「誠」を「助語(ここでは副詞を指す)ニ用フル時「ゲニ」ナリ」(訳文筌蹄)と曰っているが如きが是

れである。「誠」は其の義が主観的で「自ら確かにそうおもう」ことを謂うのであり、其の対象は内に在り、必ず下にかかる。之に対して「真」は其の義が客観的で、一般的思想、世間の常言等を「真実比の如し」とする、即ち「肯定する」のであり、其の対象は外に在り、必ず上を承ける。それは正に国語の「げに」(必ず前文を承ける)、例えば

つながぬ船の浮きたるためしも、げにあやなし(源氏、帚木)

の如きに当る。故に徂徠が例示している

誠如此

誠然

誠可謂君子

等も、若し「ゲニ」の意なら、皆改めて

真如此

真然

真可謂君子

に作らねばならないことになる。吾が邦人の漢文は、其純粹度、つまり和臭の少ない点では、それは李王の古文辞を奉じて専ら古文に擬したのにも因るが、漢籍舶来以来今日まで徂徠のそれ(漢文)が第一であることは、誰も論の無い所であろう。其の徂徠にしてなお此の如くであるとすれば、他は推して知るべきである。まして一般に虚字が軽視され、其の研究が等閑に付せられている今日に於ては、其の義用に達せざる者が多く、其の誤用が専門の大家の文中にも見られることも亦己むを得ないことで、果ては「時時」(ジジ——猶ほ常(ツネニ)と云うがごとし)を、文字通り「トキドキ」と和訓し、国語の「ときどき」と同義で「折々」の意であるとし

時時冠之(漢書、高帝紀)

沛公時時問邑中賢豪(同、酈食其伝)

の「時時」を常と解したのを批判して「常にと解しては意義が成立たない。どんなにすれば常に訪問することが可能か、毎日か四六時中か、そんな訪問の仕方が可能であるか」というような奇抜な論が突び出し、それが現今第一流の専門誌に堂々発表される仕末で、誠に憂うべく真に「長太息す可き者」である。因みに「常に」(時時——ジジ)は、其の回数が多いことの極言で、猶お「甚」(ハナハダ)と言うべき所を「極」(キハメテ)と言うがごとく、もと言語の常道であり、世間の常識である。

「金が山ほどある」、此を咎めて「山ほどあつたら百年経つても数えきれない」と笑う者があつたら、其の笑う者が先ず笑われるであろう。言辞に誇張法の有ることを知らない者は、終に書を読むことができない。以て虚字の訓訳の容易ならざると其の慎まざるべからざるとを見るべきである。而して吾人の最も深く注意し、いたく警戒せねばならないものは、和読に於ける定訓である。定訓にはよく原辞の意情を移し得ている者も少なくないが間々其の意義を誤り歪めている者があり、其の之を得ている者も、其の意義を此（定訓）に固定するが故に、其の辞の一切の義用を此（定訓）に統括し、もと其の辞の有せぬ意義を強い、往々にしていみじき謬解に陥らしめる。広池千九郎（支那文典）が、

京都と大阪とにゆく

を

行京都与大阪

と訳しているが如きが是れである。「行」は歩行・旅行等「行道概念」（ヨユク・アルク）である。「京都と大阪とにゆく」は、「目的地」を意識しているのであるから「往適概念」たる往・之（其の間には又小異がある）等の字を用いなければならない。此は誤用の例であるがそれが其（行）の定訓たる「ユク」に誤まれたことに変わりはない。而して訓訳の面に於てはそれ（誤り）が更に甚だしい。則、即、乃が「スナハチ」という一訓を共にしているために元来疑辭緩辭たる乃字を則即両字と同じく決辭急辭と解し、「ツヒニ」という和訓を共にしているために、遂終両字を混同するが如きが是れである。茲に筆者が本学年前期本学で学生の為に聊齋志異講義に際して寓目した所を中心として漢文翻訳に於ける対虚字の問題を考えて見よう。

(い) 但見女子来、望弘子不敢進（卷一、画皮）

(ろ) 投繯庭樹間、但見父来、驚曰、癡兒何至於此（卷四、申氏）

(は) 後邢至落石処、臨流於邑、但見河水清瀟、則石固在水中（卷三、石清虚）

「但見」とは「意外の発見又は現出」を表わす語で、其の用処文勢に由つて「おもいがけなくも」、「不思議や」、「ふと」等の意を作す。而るに基本には各々訳して云う

(い) と、女がやつてきて

(ろ) と、父親がやつて来、びつくりして

(は) すると、そのうちに水がすきとおつてきて、あの夢にも忘れ得ない石の姿が目映つたと。「と」が「すると」の省文であることは言うまでもない。此の種の「と」は

日ぐらしのなきつるなべに日は暮れぬ、と、おもへば山のかげにぞありける（古今、四）

の「と」のそのまま口語に継がれている者で、上文を承けてそれを再言指示するに用いる語であり、用処に由つては下に「意外の意が聞えるけれども、しかしそれは飽くまでも文勢であつて語自体の有する義用（辞義）ではない。而るに「但見」には「意外」の意が辞義として内在する。「但」はもと「衣袖を偏脱する」（片肌をぬぐ）意で、一方否定概念であり、そこから其の常義たる残存義、反転義が引伸される。此の「但見」の「但」は其の反転義の一転である。故に単なる「と、すると」ではなくて、「と、いつどこから来たのか、一人の女が来ていて」（い）、「と、ひよつこり父親が現われて」（ろ）、「すると、不思議やそこには」（は）である。なお此の石清虚（は）の訳には別に大きな誤りがある。此は形なる此の短篇小説の主人公が見た「河水」及び「石」の状態（静）であつて作用（動）ではない。

そのうちに水がすきとおつてきて

と云い、

石の姿が目映つた

と云うのは皆作用である。これ蓋し「見」の解釈を誤つたことに起因する。「見」は「ミル」は「ミル」でも、seeの「ミル」であつてlookの「ミル」ではないことは言うまでもなく、此の「目に映つた」は此の点では正解であるが、此の種の「見」の場合は「現前の事実の此の如き」（状態）を謂うのであつて其の意はむしろ there is に近い。試みに「但見」以下を訳すると、

すると不思議や（但）そこには（見）きれいな水が流れており、ちやんと（則）石はどこへもゆかず（固）水の中に在る（ではないか）

と云つたような意味である。

但字を取りあげた序に他の書中に見た誤訳の例を一つ挙げておこう。

但去莫復問、白雲無尽時（王維詩）

学者或は此の「但去」を「但（ひと）えに去れ」と読み「そうか、行きたまえ」と訳し、此の詩を説いて「強い意志的な詩である（中略）それを送る王維の言葉は、いつになく強い」と曰つている。読と訳と説と皆誤りである。王維の詩には意志的な者がないと謂うのでは勿論ないが、此の詩は少なくともそうでない。意志的なのは原文ではなくて、其の和読の国文「但えに去れ」である。即ち此の訳者は「但」の辞義を知らなくて「但去」を「ひとえに去れ」と誤訳し、其の誤訳の国文のもつ強烈な語気を原文に強いているのである。蓋し太宰春台の所謂「倭読ノ甚ダ義理ヲ害スル」（倭読要領）者の適例であろう。倘しくは此の訳者は「但」を全く「唯」と同じく「専一の辞」であると思ひ誤つていゝのではあるまいか。「但」と「唯」とは其の限定性が異なる。「唯」は下にかかつて（副詞性）「此れの専ら然る」を言い、其の義

が積極的、「但」は上を承けて（接続詞性）「ただ此れだけが例外として残存せる」を言い、其の義が消極的である。故に「但去」とは「何も言わずにゆきたまえ」（読法としては「ま」を重念する（感情的）。此の訳者の解ではアクセント（重念）は「ゆ」に存することになる（意志的）。かく言えば論者或は曰うかも知れない。「ひとえに」は即ち「何も言わずに」の意である」と。是れ「ひとえに」という国語の意情を知らない者の言である。「ひとえに」は其の義が積極的であつて、其の義の消極的なる「何も言わずに」に代ることはできない。

- (い) 初試、未嘗不少効、遂謂天下之大、挙可以如是行矣（卷一、勞山道士）
- (ろ) 已而擲筆挙皮、如振衣状、披於身、遂化為女子（卷一画皮）
- (は) 遂与俱往（同上）
- (に) 陳紅漲於面、有難色、既思道士之囑、遂強啖焉（同上）
- (ほ) 又以其独行曠野、遂与男兒交語、愈益鄙之（卷七阿英）
- (へ) 睨郎君、遂如此怕哥子耶（同上）

某本各、訳して云う

- (い) そこで天下どこでもこれで通用するものと考え
- (ろ) すると忽ち女になり変つた
- (は) そこでいつしよに行つて
- (に) とうとう我慢してそれを食つた
- (ほ) お馬鹿さんですね、あなたは。そんなに兄さんが可怖いのですか
- (へ) 男にいろいろ話しかけたりなどするのはと。其の遂字の訳を分けると、「そこで」（い・は）、「すると」（ろ）、「とうとう」（に）、見送り（ほ、へ）の四種となる。先ずオーに（ほ）と（へ）の「遂」を見送つたことに對し原作者に代つて不服を陳べたい。こんな大切な虚字を素通りしては其の句情を伝えることはできない。（ろ）の「すると」は全然誤訳。遂字からはどこをどうたたいても、こんな意味は出ない。（い）と（は）の「そこで」は「ヨツテ」の意で、遂字の因承義には得ており、（に）の「とうとう」は「ツヒニ」の意で、遂字の定訳であり其の完遂義には得ているが、此の場合にはともに切当しない。此の諸遂字の正訳を考える前に一応遂字の義用を概観しよう。

遂は説文には「亡（ニグ）也」とあるが、此の意味での使用は朱駿声が言つているように、経伝には見えないから死義と見るべく、其の生きている意義は「道（ミチ）也」である。道は人の行く所、そこには進行義が存する。遂字の語詞たる者は、此の進行義の虚用で、「進達」を其の義（虚義）の中核とする。さて「進達」即ち「進み達する」と云うことは過程概念であるから、必ず

前に上文を因承し、後に完遂を意想する。是れ遂は因承（上）、進達（中）、完遂（下）の三義を含んでいるのである。但だ其の用処文勢に由つて其の重点が動き、或は因承を主とし、或は進達を主とし、或は完遂を主とし而して其の完遂を主とする者（此が遂字の大用である）は、内又分かれて（い）其の事の決定を主とする者・（ろ）其の完遂の作用自体を主とする者、（は）其の完遂された事の内容程度を主とする者の三となる。

君与卿凶事、遂命使者（儀礼、聘礼）

此れ因承の遂である。

蔡潰、遂伐楚（僖四年、経）

此れ進達の遂である。

齊王不聽即墨大夫、而聽陳馳遂入（齊策）

此れ完遂の遂の其の事の決定を主とする者。

斬首八百、遂略定楚地（史記、高祖紀）

此は完遂の遂の其の完遂の作用自体を主とする者。

欲遂破之、而擊漢（同上）

此れ完遂の遂の其の完遂された事の内容程度を主とする者。

遂字の義用は此の如くである。其の「そこで」と訳すべき者は因承の遂だけ。「とうとう」は則ち大概の訳としては、完遂の遂の其の完遂された事の内容程度を主とする者を除き皆此（とうとう）を以て之を訳することができる。

そこで此の聊齋志異の遂字の意勢を考えると、

(い) と (ろ) と (へ) のそれは完遂の遂の其の完遂された事の内容程度を主とする者で「すつかり」と訳すべく、

(い) (それにだまされて) すつかりどのような大きなことでも（「天下之大」の「天下」は大の極言である。方所の天下——天下どこでも——ではない）この調子でやれると思ひ込んでしまう。

(ろ) すつかり女に化けてしまつた

(へ) 馬鹿な旦那さん、どうしてこう一から十まで（徹頭徹尾）お兄さまを怕がるのかしら——耶は怪（いぶかりあやしむ）の辞である。某本の訳の「可怖いのですか」は詰問である。

(は) と (に) と (ほ) のそれは同じく完遂の遂の其の事の決定を主とする者で、軽くは「おもい切つて」（に）「すすんで」（ほ一積極性を謂う。それが完遂義の顕現であることは言うまでもない）等と訳すべきである。

(ほ) の遂字は其の用絶妙と評すべく、此の遂字一字に由つて其の女の蓮葉な性格が見事に写し出されているのである。

少しも恥じらうことなく、自らすすんで男と口をきく之を省いて訳したことは返えず返えずも残念である。しかし遂字は終字と其の「ツヒニ」と云う和訓を共にして

いるせいもあつて、吾が邦人には厄介らしく、其の誤訳は大家も之を免れ得なかつた。茲に其の顯著な一例を挙げると、

皆召其徒、使視之、遂使為豎（昭八年、左伝）此れ「家来どもを一人残らず呼び出してそれを視させたと、まちがいなく本人（牛と名づけられた少年）だつたので、ではと、小姓にした」の意である。竹添光鴻（左氏会箋）曰く「非即年之事、故曰遂」と（「即年」は「ソノトシ」の意）。此れ其の和訓「ツヒニ」に涉つて遂を終と混同せるに本づく誤訳である。

妾向以君為君子也。而不知寇盜也（卷四、葛巾）某本の訳に曰く

これまであなたを立派な方だとばかり思つていました
まさか泥棒だとは知らなかつたんですよ。

此れ「まさか」の用法は正しくないけれども——「まさか」は「よもや」の意で、必ず推量辞を以て承結せねばならない（「まさか泥棒ではなかろうと思つていました」、「まさか泥棒だなどとは思わなかつたでしょう」等、但しこれでは原文には即しない——誤訳と曰うのは酷であろうが、しかしこれでは決して原文のもつヒューマラスな口吻は写せない。此の訳文の意味せる所は「人の詰問に対する弁解」である。而して其の本づく所は「不知」の解と也字の処置を誤れるに在る。即ち「不知……也」の常識「知ラザリシナリ」に拘せるに在る。先ず也字の問題から之を説くと、此の「也」は「不知」を承けているのではなく、即ち「知ラザリシナリ」（知らなかつたんですよ）ではなくて、「寇盜」を断じている（寇盜ナリ）のである。次に此の「不知」は

長恨春歸無覓處、不知軋入此中来（白居易詩）

不知明鏡裏、何處得秋霜（李白詩）

等と同じ用法で、複語の疑辭（ナントマア）であつて実字ではない。試みに之を訳すれば、言うは

妾は前々からあなたを立派な人だとばかり思つていましたのに、何とまあ泥棒さんだつたんですよとなり。

如此恋々、豈蔵有男子在室耶（卷四、葛巾）
某本の訳に曰く

そんなにこの部屋を恋しがつて、まさか男の人でも、
ここにかくしてあるのでもないでしょう！

と。先ず此の訳文はこのままでは国文として体を為さない。之をして体を為さしめんには、次の如く訂正せねばならない。

まさか男の人をここにかくしてある訳ではないのでし
ように

しかしこれは国文の問題であり、又翻訳の技巧の問題であつて、本稿の主題ではない。ここでの問題の中心は豎字の訳「まさか」に在る。豎字には周知の如く反語辭

たる者と疑問辭たる者とがあり、後者は中国人は習つて俗語（白話）の「難道」に当てて講じている。それは一応（飽くまでも一応である）相当り、而してそれ（難道）には吾が「まさか」に当る者もあるけれども、決して正訳ではない。ましてそれを以て古典中の豎字を律しられては其の古典の作者こそいい迷惑である。而るに吾が邦の中国今文学者の中には、「難道」とし云えば即ち訳して「まさか」と曰い、延いては是を以てそのまま古文の豎字に施す者が多い。恐らく誰かが或一つの「難道」を「まさか」と訳して偶々よく其の意情を伝え得たのを、後の学者が無批判にそれに倣い、遂に其の定訳として固定化してしまつたのであろう。こうしたことは、学問の世界特に言語表現の世界ではよくあることで、或一人の著名な作家などが一寸気のきいた言葉を創作すると、忽ちそれが天下を風靡して流行語となり、往々にしてそれが遂に古典化すると云つた如きことが是れで、彼の「立身、完璧、弱冠、悲願、言語同断」等の今日通行の意義（それは其の古義から視れば曲解である）の如きも、恐らく初め誰かが誤用したのが起りであろう。但だ言語の真理は適否に在るのであるから、一般にそれが認められ天下に通用するに至れば、たといそれが真の本義とは正反対であつても、それはもはや正しい意義であり其の本義を盾に其の正誤をあげつらうのは、野暮というよりはむしろ誤りである。而して其の逆の其の新義を以て其の本義を誣めるのは、其の誤りたるや更に大である。也字は俗語では「モマタ」（亦）の意であるが、是に由つて古文の也字の其の位勢の亦字に似ている者を「マタ」と訓ずべしと曰つた皆川淇園の陋は笑われてもしかたがない。「なかなか」は今日では「すこぶる」と同じ意に用いられているからといつて

逢うことの絶えてしなくばなかなか、人をも身をも恨みざらまし

の「なかなか」（猶お「かへつて」と云うがごとし）を「すこぶる」の意に解するのは、「すこぶる」が今日では「はなはだ」と同じ意に用いられているからといつて古語の「すこぶる」（猶お「すこし」と云うがごとし）を「はなはだ」の意に解するのと同時にナンセンス以外の何物でもないであろう。さて此の「豎」は猜度辭で、之を国訳すると、先ず「ドウカナア」（「ア」重念）と云つたとらであらう。随つて一句の意は

あなたがこうもこの部屋に恋々たるところを見ると、
どうかなあ、ひよつとしたら男の人をかくまつてある
のじゃないかしら

事實是の時此の女（葛巾——女主人公）は、其の恋人たる常大用を寝台の下に隠れさせていたのであり、すつかり凶星をつかれた訳である。原訳では此の緊迫した空気は写せまい。

愚哉世人、明々妖也、而以為美。迷哉愚人、
明々忠也、而以為妄。然愛人之色而漁之、
妻亦將食人之唾而甘之矣（卷一、画皮）

某本の訳に曰く「他人の美貌を貪り漁つたために、その妻も人の痰を食つて我慢しなければならぬ羽目になつたのである」と。此の訳には大きな誤りが三つある。甘字の解を誤る、是れ其の一。「亦」の対立の対象（相手）を誤認している、是れ其の二。句性をとりちがえている、是れ其の三。先ず此の甘字は、其の本義の「をうましとする」で（人の痰をおいしいおいしいと云つてたべる）、つまり逆説的な警句である。転義の「にあまんずる」（我慢する）ではない。此の訳はつまり其（甘）の国語としての常義（にあまんずる）に涉つて誤つた者、亦吾が邦学者の悲しさである。次に此の「亦」は「世の「人の夫」たる者」を、「此の短篇の主人公たる王生」に対立せしめているのである。

自分も此の王生同様（亦）自分の妻が
の意。此の訳（妻も）では、「自分の妻」が「夫たる自分」に対立していることになる。

自分がひどい目（妖怪から心臓を奪われた）に逢つただけでなく其の妻も亦

次に此の一連の句は「主人公王生が色漁りをした為に妖怪から心臓を奪われ、其の妻が気狂い（実は春の神）の痰を食つた」と云う事件に本づいて、世の「人の夫」たる者へ発した警告であつて、其の句性は「説理」である。而るに原訳ではそれが全く此の一篇の内容の要約で其の主人公への批判となつている。

なお此の然字は訳文からははずされているが、それは此の場合（此の然字が）意味の軽い語であるから、さして支障はないけれども、一寸常法と異なるので一言しておこう。然字は承上転下（逆接——シカレドモ・シカモ等）を常義常法とするけれども、往々にして順接もあり（此れ其の後世義を以て言う。其の本来は順接である）、而して間間 又形容の辞（副詞性）として専ら下にかかる者もある。

固朕形之不服兮、然容与而狐疑（楚辞、九章）此皆学士所謂有道仁人也。猶然遭此菑（史記、游侠伝）
等が是れで「シカリ、さように」の意である。此の然字もそれであり、随つて「然愛人之色而漁之云々」とはほかの女の美貌を愛して之を漁ると云うような、そんな（然）ことをすると、自分も亦此の王生と同様に（亦）妻が人の痰をうまいうまいと曰うて食べることになるであろう（妻に人の痰を食わせる結果になる）の意である。因みに「人之愛」の「人」は暗に下の「妻」に対しての意。だから「妻以外の女」の意となる。原訳の「他人」では此の意（妻以外の女）が写せない。

虚字の移訳で管見に入つた主な者（勿論筆者が取扱つた此の数篇内に於て言う）は右の如くであるが、序に実字の誤訳及び句意の歪曲で目に触れた者を一、二捨い挙げて卑見を陳べておこう。

女笑曰、不致度曲、恐消君魂耳（卷八、緑衣女）某本の訳に云う

歌なんかお聞かせしないで、多分あなたの魂を奪うことはできますでしょうよ

と。其の誤訳たることは一看便知だが、其の此の誤訳の本づく所は、蓋し先ず恐字の虚実を誤つたことに在り、次いで恐字の和読の定訓「オソラク」を国語の口語の「おそらく」と混同したことに在る。此の恐字は実字（オソルー心配する）であつて虚字（オソラク—多分）ではない。次に、仮りに数十百歩を譲つて此の恐字の虚字解を認めたとしても、恐字の虚用（オソラクハ）は順接性（ズンパーオソラクハ）であつて、逆接性（ザルモーオソラクハ—お聞かせしないで）ではない。拙訳は左の如し。

妾が歌をうたうのをひかえているのは、妾がうたつたら（あまりに上手なので）あなたの魂を奪つてしまひそう心配だからです

上文の男の言葉「卿声嬌細、俺度一曲、必能消魂」（あなたは声がなまめかしく細やかだから、もしも一曲うたつたとしたら、きつと人の心をとろけさせるでしょう）の「消魂」を承けて、わざとそれを実義（ほんとうに魂が消けて死んでしまう）に曲解してしやれたのである。原訳では、其の意味をとりちがえていることは言うまでもなく、此のヒューマも全然訳出されない。

女蹙然変色、遽出、呼玉版抱兒至（卷四、葛巾）某本の訳に云う

すると女は顔を硬ばらせて色を変え、急に部屋を出たかと思うと、子供を抱いてくるように玉版を呼んでと。拙訳は左の如し。

急に部屋から出て大声で「玉版さあん、子供を抱いていらつしやい」と言つた

原文は間接叙法になつているが、其の意はもとより此の意である。「呼」は「よばれる」ことで、単に「よぶ」（声の大小を問わない。「小さい声でよぶ」とも言える）ことではない。原訳では随つて原文の緊迫非常の空気は写せない。

恍惚若夢、但覺心隱痛耳（卷一、画皮）

某本の訳に曰く

うつらうつらとして夢のようだ、ただ何だか胸がちくちく痛む

此の訳は時相を誤つている。此の訳では「現在」になつているが、原文は其の死中のことで（甦生後の追憶）あるから「過去」である。即ち

ぼんやりとしてまるで夢の如く、他には何も覚えない
がただ（但）心臓のあたりが、何かこう（隠）痛いよ
うな気がした
の意である。

忽見壁有贈曹国夫人詩、頗涉駭異、因詰主人（卷四、葛巾）

某本の訳に曰く

驚きあやしんで、主人にきいて見た
と。「頗涉駭異」とは、「涉」は「其（下文）の方面に足がかかる」意で、頗る駭異的（突飛でおどろきあやしむべき状態）なるを謂う。即ち壁上の「贈曹国夫人詩」についての説述で、人（常大用一此の短篇の主人公）が「驚きあやしんだ」のではない。

懐之専一、神鬼可通。偏反者亦不可謂無情也（同上）
某本の訳に曰く

一心に思いつめると、鬼神に通ずることができる。ふりきつて帰つて行つたものも、決して無情とはいえない

と。いみじき誤訳である。「偏反」は論語、子罕篇所引の逸詩

唐棣之華、偏其反而。豈不爾思、室是遠而の「偏其反而」に本づく。「偏反」とは、「偏」は「かたむく」意で、「花びらがひらひらと翻える（反）」一相思の情の盛んな喩えを謂う。但だ此の「偏反者」は「花」の代語として用いたのであつて、其の意は単に「花」と云うに同じである。「ふりきつて帰つて行つたもの」とは、飛んでもない見当ちがいである。古典の教養の欠くべからざる所以である。因みに筆者は以前ラジオで、ある大学の先生が「柴桑」を「しば」や「くわ」と訳しているのを耳にし、「柴桑」位が分からなくて詩を説くとは随分あつかましい話だと思つたとともに、大学の先生も安くなつたのだと歎いたことがある。「柴桑」は言うまでも晋の陶潜（淵明）の郷里の名で、詩などでは直接陶潜自身の意にも用いる。さて此の一連の句意は左の如くである。「懸命に之を懐えば、鬼神をも動かすことができるものだ。あのひらひらと翻える草木の花でも感情がないとは謂えない。彼の葛巾（此の短篇の女主人公で、牡丹の名花「葛巾紫」の精）が化して人身となり、常大用（此の短篇の主人公）の妻となつたのも、常が牡丹を愛することが専一であつた為め、花の精を動かしたのだ」

○昨日踏青小約未応争。嘱付東隣女伴、少待莫相催、著得鳳頭鞋子即当来（卷七、阿英）

某本の訳に曰く

昨日遊山のときのお約束、忘れたのではありません。東隣のお友達に頼んでありますから、いつしよにお遊びになつて、しばらく待つて下さいな。鳳の飾り鞋子をはいて、すぐ帰つて行きますから。

と。此の訳、支離滅裂である。此の詩は「踏青」（清明一四月四、五日ごろ、「春分」の次「穀雨」の前の節気の名、俗に清明節と呼ぶ一日郊外に出遊するを「踏青」と曰う）の歌である。此の訳では「踏青の翌日」詠んだ詩となる。それが才一詩人の常識でない。拙訳は左の如し

昨日、明日の清明節には、どこか若草におう野山に遊びに往きましょうよ、と東隣りのお友達（女伴）とお約束してしまつた（小約）。今さら、あたし行くのもうやめたワなどとは、一寸言えないワ（未応争一以上は此の詩の女主人公たる少女のモノローグである）まだ用意のできない彼の女は、東隣りの女友達にたのんだ（嘱付一以上地の文）。「あの某甲さん、お願い、一寸待つてエ、そうせかせさないでよ。妾、あの鳳の飾りのついたお靴はいて行きたいの。今それ出しているのよ。はいたらすぐ往きますから（以上女主人公の白）

右虚字を中心として聊齋志異翻譯に対する愚見の一端を述べたのであるが、此はもとより漢籍の訓訳全体に亘る問題であつて、独り聊齋志異の訓訳だけのことではない。因つて聊か聊齋志異以外の古典に関するもので最近管見に入つた者一、二について述べておこう。

曾以為孝乎（論語、為政）

曾は反理性疑辭で、「ナントマア、カエツテ」と云つたような意である。朱注に云う「曾猶嘗也」と。此れ朱子千慮の一失で、曾の才登切（猶嘗也）なる者は、論語の頃にはまだ言語界に出現していなかつたのであり、随つて孔子はまだこんな言葉は知らなかつたのである。之を孔子に言わせようとするのは、猶お山部赤人や清少納言にムードやレジヤを口にさせようとするがごとし。而るに或る研究者は、朱子の此の解を支持して曰く「かつて（嘗）と訓じても大体意味が分る」と。此の「大体意味が分る」と云う非科学的な態度は、別に学問の態度として批判されねばならないが、それは姑く措き、其の此の曾字の「かつて」と訓ずべきことを認めたのは、言語の歴史性を無視せる暴論である。

爾何曾比予於管仲（孟子、公孫丑上）

此の曾字亦同じ。朱注に云う「曾之言則也」と。彼の研究者は又此の朱注を支持して曰く「すなはち（則）と訓じて「とんでもない」（反理）意をもたせる、之（「之」は「此」の誤用。此之両字が同訓（コレ）なるに涉る誤用である。「之」は主格（コレガ）には立ち得ない）が従来我が国の漢文よみの習慣となつていたように思う」と。陋習はいかに其の歴史が長かろうと、断じて之を打破せねばならない。「すなはち」と訓じて「とんでもない」意をもたせる、こんな理論が通用するなら、極言すれば、ことばはどれか一語あれば事足りることになり、それはやがてことばの無用を意味する。「すな

はち」は即ち「とんでもなくない」ことで、「とんでもない」と義正に相反する。而して此れ皆畢竟其の定訓に拘せるの致せる病であるが、其の病は其の

子夏之門人小子、当洒掃應對進退則可矣、抑末矣。本之則無。如之何（論語、子張）

の抑字を説いて「この抑は上文を批判しようとして開きなおし「元来」とか「元々」とか「全体」とか「一体」とかいうような意である」と曰えるに至つて極つている。「抑」は「抑止」の虚転で、「上文言う所を一寸おさえて反転する所以の辞である。猶お吾が俗語の「それもそうだが」と云うがごとし。随つて然字と義類であるけれども、それよりは其の意が柔軟である。即ち論語の此の「抑」は上文「洒掃應對進退」を承けて一応之を肯定し、而る後其の末節なることを反転しているのである。彼の元来、元々、全体、一体解は「ソモソモ」と云う国語（即ち其の定訓）の意義で立てた解である。抑字にして此の解の或は通用する者は、其（抑）の句首に据えられて語を發するに任ぜる者（発語辞）だけ。句間の抑字からは、そんな意味はどこをたたいても出ない。其の又此の解を以て

女自房觀之曰、子皙信美矣。抑子南夫也（昭元年、左伝）

の「抑子南夫也」を説いて「『本当のこと子南は男らしい』と訳すべきだ」と為しているのはいよいよひどい。「本当のこと子南は男らしい」は「誠子南夫也」である。之を要するに此れ皆定訓の罪、と云うよりは定訓に拘せる過である。

和語の定訓に拘するの病は此の如くであるが、漢文訓訳上更に最も先に知り最も深く注意せねばならないことが一つある。「漢文と和文とは其の語序が異なる」と云うこと、是れである。此れ極めて平凡な万人尽曉のことに属するが、其の実は此の平凡な万人尽曉のことが案外忘れられ勝ちである。而して其の之を忘れしめる者は即ち和読の「返り読み」が是れである。

揖下礼也。今揖乎上、泰也（論語、子罕）

乎字は「語の余」（説文）で、上の語に襯する。故に「揖乎上」は、揖乎上であつて揖乎上ではない。筆者が此の説を某誌に發表したら、其の誌の一會員から「とんと分らぬ議論だ」、乎は揖の字に襯するなどという意味は全く介字の本質を見失つた論だ。この場合乎は助字ではない介字だ」と云つた批判を受けた。此の批判者は説文も読んでいないようだから、あまり弁ずるに値しないが、世には此と其の見を同じうする者もあるように思われるので、筆序でに少し此に対する卑見を陳べておこう。此の批判者をして此の誤れる批判を為さしめたものは、其の乎字を介字だと思ひ込める先入観であるが、其の此の誤れる先入観を作つて乎字の本質を見失わしめたもの

は、実に和読の「返り読み」であると思う。乎字介字論の根拠は、言うまでもなく其の於字との声通及び位勢の相似に在るのであるが、若し乎於が同義で、乎字も亦於字と同じく介字であるならば、何を以て於字には

今吾於人也（論語、公冶長）

於我如浮雲（同、述而）

の如き用法があつて、乎字には全くそれがないのであるか。此れ乎字が介字でないことの明証である。乎字が介字でないことは又其の送末に常用せられるのに觀ても明らかである。其の句中に在るは兮哉矣等の諸字と義類である。此等の字の句中に在る者を下に属けて読む者はなからう。若し「乎字は上に襯する」と云うことが「とんと分らぬ議論」であるならば

巧言令色鮮矣仁（論語、学而）

も「とんと分らぬ」ことにならう。

筆者は漢文音読論には極めて批判的であり、其の訓読を、古人の偉大な功績として称える者であるが、しかし此の訓読と云う特殊な誦読法が学者を禍し、之をして不知不識の裏に漢文漢語の本質を見失わせたことの決して少なくないことは認めざるを得ない。要は其の字の意義性格を見極め、其の和訳をそれで是正し、以て其の文義を正しく享受し正しく移翻せんことを努めるに在る。

薦雨莊詩抄

井上寿老

水上草

惡木易生長、美花多雨風。佳人之命薄、今古恨相同。
親老餓陋巷、曲難鞭樊籠。媚鸞容秦楚、身任命窮通。
譬之水上草、隨波西又東。色芸名双絶、王孫意千重。
花晨及月夕、交情日以濃。覺來春宵夢、孤枕淚痕紅。
悴顏無復理、朱粉奩塵從。忍見屏風鴛、与鴛長相終。

醉狐歌

饗応飽美酒、山坡踏月歸。杖頭芭苴撼、佳香四辺飛。
西山秋風冷、草實不救飢。樹蔭窺客至、詎人矢代養。
女羅作巾帶、葛葉為裳衣。姝麗方二八、婀娜翻天姿。
眉黛面得好、不奈巨尾垂。婉然滿面媚、問客何所之。
若不嫌賤劣、請為君爨炊。人狡過狐狡、偽許与相隨。
為買酒与肉、聊以代聘儀。馬食而牛飲、舐盤以啜危。
可憐野狐子、醉夢頻掩髭。繫縛在楹柱、何所振其技。
嬌命震百獸、無由借虎威。懷其首西丘、跋扈与心違。
休笑野狐愁、欲欺自被欺。区々弄智者、不為此狐稀。

宮怨詞

雪肌如凝脂、蛾眉不勞黛。艷容月蔽顏、秀色花羞穢。
十五簾梨園、歌舞傾倚輩。春風飄輕裾、紅燈照嬌態。
歲月不私人、花信取次代。眼前風景移、綠衰而紅退。
蓬鬢金釵斜、对鏡面自背。郎也莫顧哀、庭草不用刈。
愁來漫捲簾、遠山白雲凝。却憐半夜夢、芳心為郎碎。

歲旦書感(辛丑)二首

晴雀喧軒噪、田廬春回初。宿雪分隴麥、山日及園蔬。
元正曆新旧、賀箋人親疎。处世雖謀拙、案上足好書。
引証翻蠹矢、綴句拾唾余。五窮何須送、米資舌可鋤。
聊學陳仲子、容膝意晏如

五窮一智窮、學窮、文窮、命窮、交窮、(韓愈、送窮文)

陳仲子一又曰於陵子仲。戰國、齊高士。其言曰、所安不過容膝、所甘不過一肉。但此語在高士佞以為其夫人語。

壁裝添新曆、庭禽換旧調。隴麥鬚漸長、臘雪斑未消。
駑駘鞭不進、馬齡与歲高。隱居無人顧、放言舌徒勞。
何意今日士、絕無丈夫操。堂堂日出域、西傾媚紅毛。
憐吾性狷介、白眼蔑眨褒。守愚又擁拙、不敢折此腰。
三兩楹陋室、詩書且寄邀。但有物不乏、野菜与村醪。

肥後道中作四首

塵市既後退、送田忽迎池。野花呈嬌色、遠巒橫画眉。
山迴路漸險、谷轉景愈奇。林入村落絕、俗隨里閭移。
紅柿綴綠竹、清溪繞疎籬。天晴祖母近、地高九重卑。
万杉戈立处、豐肥分自茲。肥雲連豐樹、依依翠幕垂。
逶迤曲又折、外輪下長坡。吾有烟霞癖、俗紛難及時。
勝因猶未盡、今日遂寸私。謏劣恥山水、聊報五言詩。
四極山下路砥平、菴灣凝碧湛新晴。
鄉土却愧少知識、車掌誦說傾耳聽。
神角寺畔秋斑爛、清流紅葉美於春。
但慙肚裏少才藻、無復好詩酬好山。

神角寺下溪山、景趣尤佳。盖肥後路上山水以此為压卷。俗謂為小耶馬。雖不必当、亦不必斥。但肥後路之美、在高原而不在山水。固与耶馬異其性。彼此別論可也。

險阻既遠開田園、聞說名匠所生村。家家檐際着紅柿、望車稚犬吠入門。
藁隙忽指築石峭、知是身已入竹田。車掌語熟舌如滑、談史千載宛似看。
却喜曾遊遊記憶、眼前無景不斬新。

阿蘇

登登山腹路幾彎、身坐輕車不知艱。帶硫煙噴太古旧、翔空輿誇近代新。
十里外輪一処缺、万頃平野巨壁環。觀峰雲呼猫岳樹、南北競勢兩孱顏。
決皆東天一盆伏、道是吾鄉由布山。氣冷飛塵疑下雪、敬巾訴寒相促還。
回首山頭雲二色、一是真雲一噴煙。

觀峰一謂大觀峰也。大觀之名、蘇峰德富氏所命。為外輪山中最高峰。隔阿蘇平野、与阿蘇五岳對峙、呼即欲答。

偶成五首

先生教之不知之、弟子學之不行之。
入學畢竟何所用、不有學歷人莫知。

蠹矢堆裏避世塵、甘作數世紀前人。
是非何決事新旧、新通真处是真新。
有善有惡兩是性、存心歸治待縣充。
人眼豈本分青白、心和触处皆春風。
先生意足非才贍、物不欲時總自占。
山下有泉水淺清、泉上有梨花冷艷。(寄梨花)
妻笑讀書不療飢。自信樸學莫人知。
半庭梅影三更月、閑坐寒窗刪旧詩。(寄梅花)

詠史(卞和)

只為璞玉深韞光、楚山花草血淚香。
悲君膝行伏殿下、更驗貞証獻嗣王。

早春

庭樹未着嬌鶯鳴、南枝已見春意生。
半池薄冰明曦色、滿畦春霏映麥青。

梅花

嬌鶯未訪寂橫斜、暗香憐兄先百花。
却怪孤山处士室、漫入尋常百姓家。

宋林逋、字君復、諡和靖、結廬西湖之孤山、二十年足不及塵市。一生不娶、妻梅子鶴。其山園小梅詩云、疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黄昏。宋黃山谷謂水仙為弟梅為兄

梅竹圖

翠葉迎風伝私語、素花侵雪解香唇。
這裏無物資名利、拳付詩人兩結綰。

閑居

此是何物好事人、茅廬三間對溪山。
平生撰述無世用、紙積墨堆既等身。

蕨

蔑天欺人政道廢、天譴人怨恬莫悔。
王嚇斯怒誅独夫、爰穢天工人其代。
独夫亡滅有數存、以暴易暴終弗全。
周發当年有慙德、西山万古長蕨拳。

春漸深

柳葉日長鶯語滑、菜花風暖蝶夢香。
野川昨雨新漲水、芦芽叢处濁流洋。

觀花懷往

歌舞已成昔日夢、煙花不是少年春。
記得遼山行樂处、滿地紅花照紅顏。

初夏出行二首

五月園林似開暄、新旧幾樣綠重重。
東隣新婦先得子、潑潑朱鱗躍薰風。
水光如染山光研、初夏田園眼欲鮮。
豐前西去筑前路、塵情暫作画裏人。

詠虎

密林搏兔彼一時、檻弄搖尾得食遲。
寒園夜深夢冷处、篁風山月隔鉄扉。

画 蘭

生在深山人莫知、風雲月露独相宜。
縱令好事栽盆去、不失溪山深处姿。

自嘲 詞

路歷羊腸脚屢蹶、年加馬齒日將斜。
青雲航海肩高聳、白首臨書口幾嗟。
曾笑水中人掬月、今慙鏡裏我尋花。
自嘲潦倒志空在、拋筆南窓对晚鴉。

讀滄浪詩話

鏡月水花何处尋、笑他著意漫隱深。
風騷何必事妙悟、尋常花月足幽襟。

閨 情

于役十年雁信賒、忍看燕子含泥斜。
清光照出征夫月、紅淚灑為愁婦花。
情話一場春夜夢、芳心千斷遠山霞。
柳綿無力隨風舞、來撲悴顏黏碧紗。